

検定試験の質の確保と活用について







公益財団法人 日本英語検定協会

2016年1月15日

内容

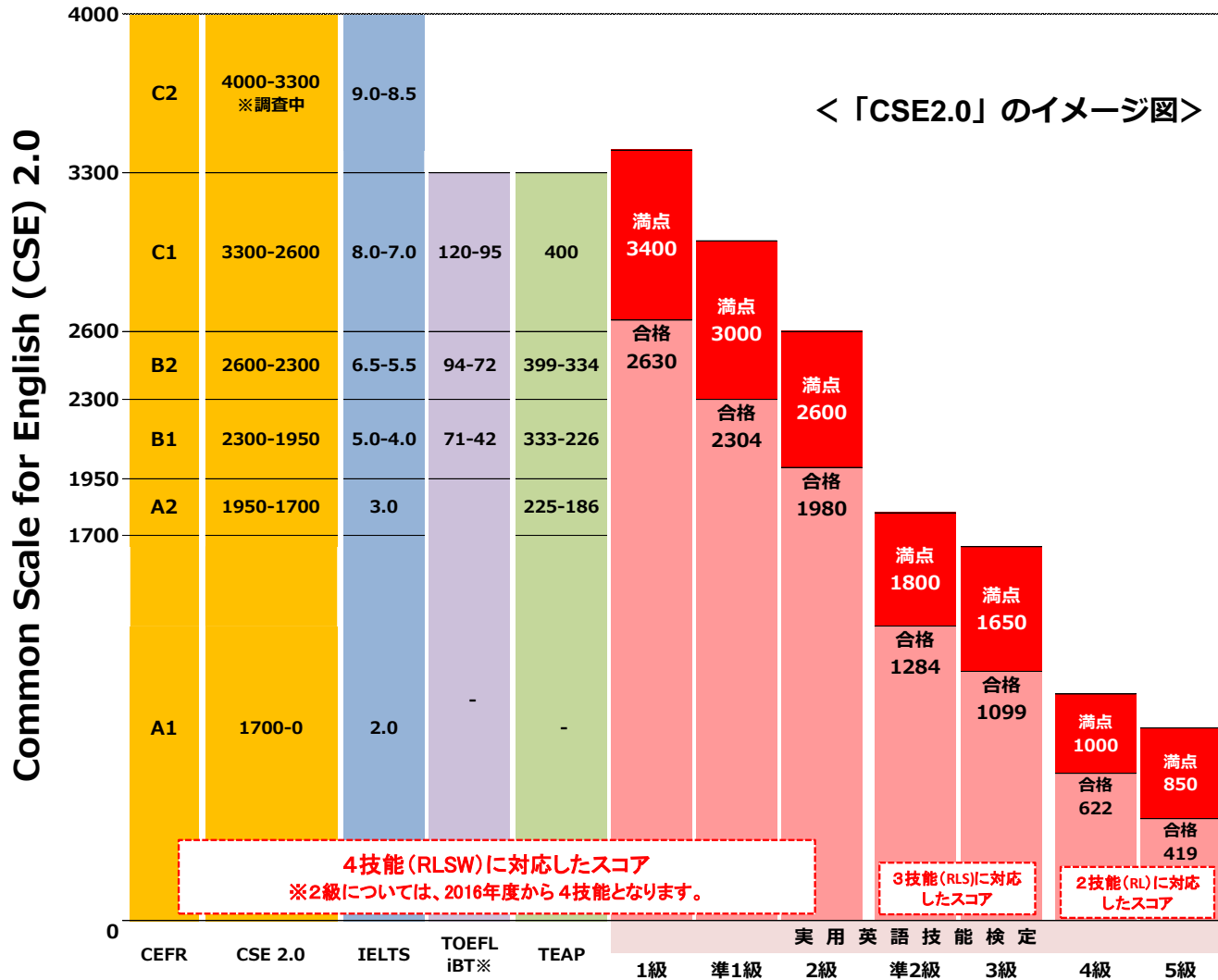
- 検定事業の概要
- 検定試験の質の確保について
- 検定試験の活用について
- 第三者評価について

当財団の検定事業の概要

当財団の検定試験	検定の概要	主な対象	志願者数（2014年度実績）
実用英語 技能検定 	日常生活や社会生活でのコミュニケーションに欠かせない英語4技能をバランスよく測定	<ul style="list-style-type: none"> 小学校高学年から中学・高校生が中心 上位級は生涯学習者も 	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> <p>約 2,635 千人 (英検*の志願者総数)</p> <p><small>* 2015年4月よりテストブランドを統一</small></p> </div>
英検IBA 	「短時間」「低価格」で英語能力や伸長度を判定するプレースメントテスト	<ul style="list-style-type: none"> 自治体をはじめ数多くの団体様にて採用 	
英検Jr. 	児童が楽しくチャレンジできるゲーム感覚の育成型リスニングテスト	<ul style="list-style-type: none"> 幼児・児童向け 	
	大学入試を想定した4技能型のアカデミック英語能力判定試験。2014年度より実施	<ul style="list-style-type: none"> 大学受験生（高校2年生以上） 	約 10 千人
	世界中で信頼性が評価されている英語運用能力試験	<ul style="list-style-type: none"> 海外留学志望者（原則16歳以上） 	約 31 千人
	550以上の企業・団体が採用するビジネス英語検定。4技能を評価	<ul style="list-style-type: none"> 企業・団体に所属する社会人 	約 11 千人

CSEを活用した英語能力向上に関する対応

CSEとは、CEFRのA1からC2レベルまでの範囲を、「スピーキング」「ライティング」「リーディング」「リスニング」の各1000点満点とし、合計0点から4000点スコアに尺度化したもの。



CSEを活用した英語能力向上に関する対応

「総合的な英語力」と「4技能ごとの能力」を絶対指標で測定します。

⇒ 得意・不得意分野が明確となり、学習の重点をどこに置けばよいか明確になります。

2016年度より、より精緻化された「CSE2.0」になります。

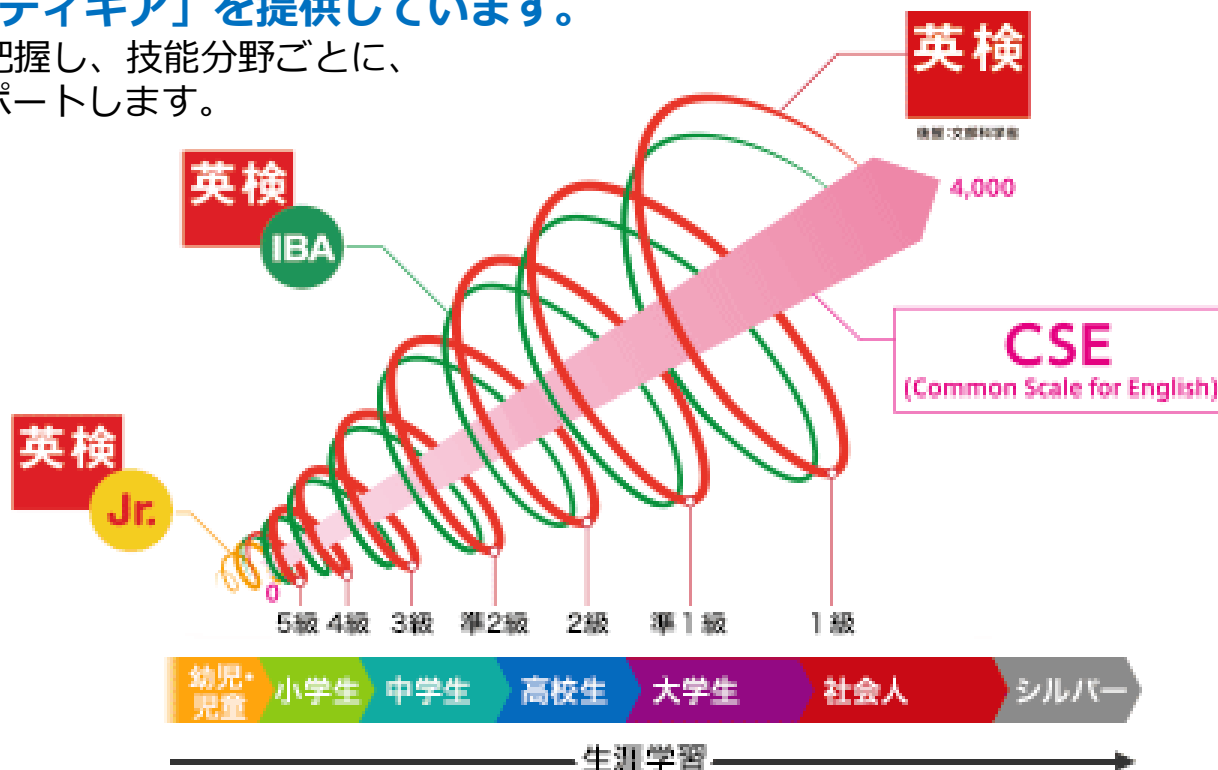
⇒ TEAPに加え、実用英語技能検定がそのまま大学入試の出願要件としてご利用いただけます。

実用英語技能検定 / 英検Jr. / 英検IBA / TEAP / IELTS 等でスコアを比較できる共通尺度です。

⇒ 学習段階に応じて、異なるテストにおいても、共通尺度で英語力の伸びを継続して測ることができます。

学習サポートプログラム「スタディギア」を提供しています。

⇒ CSEの技能別スコアで弱点を把握し、技能分野ごとに、目標級に向けた学習計画をサポートします。



内容

- 検定事業の概要
- 検定試験の質の確保について
- 検定試験の活用について
- 第三者評価について

品質管理の取り組み（内容面）

－ 実用英語技能検定 －

基準となる資料類との出題問題の範囲・難易度との整合性の確保

- 5級～3級では中学校の学習指導要領や検定教科書の内容を、準2級・2級は高等学校の学習指導要領や検定教科書の内容に配慮して作成している。 ※準1級・1級にはそのような基準を設けていない

制作過程における問題の評価・修正

- 問題形式ごとに作成工程管理者を配置し、内容や難易度のチェックは常に複数名で取り組んでいる。
- それぞれの級の受験者レベルを熟知した外部校閲者が内容・難易度を確認している。

試験結果からの出題問題の評価

- 小問ごとの正答率や選択肢ごとの選択率に加え、IRT(項目応答理論)で得られる数値結果も利用して、毎回の結果分析をおこなっている。

合否判定

- 英語教育や統計学の専門家を外部より招聘し合否判定会議を回次ごとに開催。受験者の能力値、問題難易度値等の過去平均の推移や受験者属性を考慮し、妥当性を確認している。

2016年度からの主な変更点

- 全級において英検CSEスコアを導入しスコアでの合否判定へ移行。
- 2級にライティングテストを導入し、4技能化を実現。また観点別採点の導入と1級・準1級の問題形式見直しも同時に実行。
- 4級と5級にスピーキングテストを導入し、全級でのスピーキングテスト実施を実現する。

品質管理の取り組み（内容面）

－ TEAP －

基準となる資料類との出題問題の範囲・難易度との整合性の確保

- アカデミックな場面での英語運用能力を測定することを目的とし、高等学校の学習指導要領の考え方、内容に配慮し、高大接続を意識した出題内容および難易度を設定している。
- 問題のCEFR（欧州言語共通参照枠）との関連性については英国の独立研究機関 CRELLA * 研究所に研究を依頼し、レポートを公開している。 * *Centre for Research in English Language Learning and Assessment*

制作過程における問題の評価・修正

- 問題形式ごとに作成工程管理者を配置し、内容や難易度のチェックは常に複数名で行っている。
- 受験者レベルを熟知した外部校閲者が内容・難易度を確認したうえで、全ての問題を予備テストで出題し、質が確認された問題を本試験で出題している。

試験結果からの出題問題の評価

- 毎回実施後には、問題毎の選択肢選択率やIRT(項目応答理論)から得られる指標を元に、問題の質を評価している。

品質管理（実施プロセス面）の取り組み

検定試験の自己評価の実施

- 実施主体、実施内容、実施手続き、検定結果の活用促進、継続的な学習支援、情報公開の各項目について自己評価をウェブサイト上で開示し年1回更新している。
- 外部有識者や教育現場からのアドバイス・フィードバックを検定の企画・運営に随時活用している。

受験機会の拡張

- 公開会場（約500会場）、準会場（約18,000団体）、海外会場（公開会場3会場、準会場130会場）
- CBT会場（約18会場）の設置による受験機会のさらなる拡張
- 障がい者のニーズに応じた幅広い特別措置（点字、拡大文字、テロップ、口述解答、強音放送等）

問題漏えいの防止

- 一次試験では金・土・日曜の準会場実施で異なる問題セットを使用している。
- 二次試験においても、時間帯に応じて複数種類の問題セットを使用している。

セキュリティーの担保

- 申込手順での本人確認（本会場での受験票への顔写真添付、身分証明の提示、不備対応票の運用）
- 試験資材や答案の配送など、試験実施にかかる個人情報の取り扱いの厳重化

実施・面接の質の担保

- 実施委員規約・面接委員規約の規定
- すべての登録面接委員への評価トレーニング（オンライン）の実施
- 実施マニュアルによる試験中の不測の事態（地震、不正行為、リスニングトラブル等）への統一対応
- ICTを活用した面接試験の採点補助（TEAPでの録音による採点管理 等）

内容

- 検定事業の概要
- 検定試験の質の確保について
- 検定試験の活用について
- 第三者評価について

実用英語技能検定の活用

- 中学・高校・短大・大学入試で英検資格取得者を優遇
- 英語科目の単位認定
- 国家公務員採用総合職試験で点数加算（準1級以上）
- 英検1級合格者は国家試験通訳案内士試験で外国語（英語）試験免除
- 留学時の英語力証明として認定（2級以上）
- 高等学校卒業程度試験の英語試験免除（準2級以上）
- 英語教員採用時優遇措置（2級以上）

各種検定の大学入試採用状況



後援:文部科学省

- 約60の大学、約50の短期大学、その他高等専門学校などあわせて約120校が一般入試に採用している。
- 300超の大学、約140の短期大学、その他高等専門学校などあわせて約500校が推薦入試に採用している。



- 現在26大学にて採用決定している。
- 上智大学、青山学院大学、東京理科大学の一般入試において、ひとつの外部試験のみを出願基準とする「TEAP利用型入試」がスタート。



- 「スーパーグローバル大学創成支援」「経済社会をけん引するグローバル人材育成推進事業」に採択された大学の約9割が各種入試に採用している。

実用英語技能検定の海外留学語学力証明採用状況

オーストラリア

- **約800の中等教育**（中学、高校）が2級Aから準2級を採用
- 約146の小学校（初等教育）が3級を採用
- 2大学が1級・準1級を採用

アメリカ

- **約360の大学**が準1級から2級Aを中心に採用
- その他、約10校の大学準備校・語学学校、専門学校等にて採用

カナダ

- **10大学**が1級から準1級を採用
- その他、高校や大学準備校など4校で採用

内容

- 検定事業の概要
- 検定試験の質の確保について
- 検定試験の活用について
- 第三者評価について

第三者評価について

① 検定試験の自己評価・関係者評価・第三者評価について

- 「自己評価」については、新たな気づきを促すなどの観点から必要だと考える。
- 「関係者評価」については、受験者の信頼につながるような透明性を担保しづらいおそれがある。
- 「第三者評価」は、社会的に安心して受験できる信頼性の高い検定試験であるために必要だと考える。
- なお、それらの関連については、自己評価のうえで第三者評価を受ける方法が望ましいと考える。

② 第三者評価を実施すべき検定試験および評価項目について

- 広く外部で活用されるような検定試験は、第三者評価の対象とするべきである。
- 評価項目は、文部科学省の有識者会議で策定された「検定試験の評価ガイドライン」に沿って策定されたものであれば、多面的であり、内容も練られており、望ましいと考える。

③ 第三者評価の実施機関について

- 非営利団体が望ましいと考える。また、社会的信頼性・客観性を担保するうえで、何らかの認証・認定が必要と考える。